

第6次神戸市基本計画

—2035年の神戸—

神 戸 市

(目次・構成)

1 基本計画の策定にあたって

2 神戸市基本構想

3 神戸のこれまでと今

(1) 神戸の経済発展

①開港とともに発展したまち ②時代の変化に伴う産業の転換

(2) 神戸の人口推移

①これまでの人口推移 ②神戸の人口動態の特徴

③今後の人口見通し

(3) 神戸の都市開発

①これまでのまちづくり ②現在の状況

(4) 幾多の災害を乗り越えてきたまち

①災害の歴史 ②市民の誇り

(5) これまでの取り組みにより見込まれるまちの変化

①神戸空港の国際化 ②都心三宮・WFの再開発

③駅周辺のリノベーション ④森林・里山の再生

4 第6次神戸市基本計画 -2035年の神戸-

(1) 10年後の都市像

① “ともに描いた10年後の神戸”

② KGI (数値目標)

(2) 都市像を実現するための方向性

基本姿勢 未来を見据えた都市の持続可能性を最重視

方向性Ⅰ 世界と繋がる2つの港 「新たな時代の国際都市」へ

方向性Ⅱ 個性豊かで多様な地域の融合「日常と非日常が交わり続ける都市」へ

方向性Ⅲ ともに乗り越え育んだ絆「いつまでも幸せを感じ、分かち合える都市」へ

1 基本計画の策定にあたって

神戸市の総合基本計画である「新・神戸市基本構想（1993年策定）」、「第5次神戸市基本計画（2011年策定）」及び「神戸2025ビジョン（2021年策定）」は、いずれも2026年3月に計画終期となります。

全国的に人口減少や少子・高齢化が進む中、未来にわたって持続可能なまちづくりを進めていくためには、市民と行政が目指すべき神戸の姿や方向性を明確化し、長期的な視点をもって、ともに運営していくことが求められます。

そのため、本市においては、新たな総合基本計画の策定を、市民の市政参画への機運醸成の機会とするとともに、行政内部で共通の価値観を持ち、部局間の連携を図りながら一貫性のある施策を展開していく契機とすることとしました。

新たな基本構想は、6万人を超える多くの市民から様々なご意見を頂きながら、審議会において議論を積み重ね、策定されました。この基本構想は、計画終期を設けておらず、いつの時代でも変わることのない神戸の“基本理念”として、神戸がこれからも大切にし、未来に紡いでいく価値や、未来に向かって目指すべき姿が描かれています。

基本構想の下位となる新たな基本計画については、神戸のこれまでの歴史や現状、多様化・複雑化する社会課題を踏まえながら、基本構想を基に2035年の神戸のありたい姿と、その実現に向けた方向性をまとめ、今後の10年間の指針として策定しました。

策定にあたっては、100回を超えるワークショップを通じて多くの市民や関係者と議論を重ねるとともに、WEBアンケートやGIGAスクール端末を活用して市内の小中学生等からも意見を集約し、総勢5万人を超える方々にご参画いただきました。

2 神戸市基本構想

神戸は、海と山に囲まれた美しいみなとまちです。開港以来、海外との交流を重ね文化や流行を日本に生みだしてきました

神戸は、多彩な表情を見せるまちです。都会と里山の共存。洗練されたまち並みと下町の活気。まちに溶け込む坂道も。毎日違う風景を見せてくれます

神戸は、人間らしいあたたかみのあるまちです。ともに困難を乗り越えていく絆。多様性があふれる開かれた気風。いつでも神戸は。すべてのひとをやさしく包み込みます

これまで神戸には多くのものが受け継がれてきました。これからも神戸は。世代や立場を超えた繋がりの中で。広く内外に貢献し。未来に向けて進んでいきます

培ってきた技術と知の集積により。時代を彩る産業とひとが育つまちへ。世界を臨む海や空からひとが集い。新たな価値の創造を実現するまちへ

誰もがひとに寄り添い、助け合いながら。それぞれの夢に挑戦できるまちへ。豊かな自然とひとの営みが織りなす。一人ひとりが幸せを感じられるまちへ

神戸は、いつまでもまちの誇りを育み。次代に紡いでいきます

基本構想の前段には、神戸の歴史や都市のなりたちに触れながら、「海と山に囲まれた美しいみなとまち」、「多彩な表情を見せるまち」、「人間らしいあたたかみのあるまち」という3つの神戸らしさが描かれています。

神戸は大都市でありながら海と山といった自然に恵まれ、古くから「進取の気風」に富む、国際色豊かな港町として発展し、新たな流行や文化を生み出してきました。人の手が入り続けることによって緑滴る山になった六甲山、茅葺民家が点在する里山、古くからの景勝地、須磨や垂水の海岸、外国風の建物が残るまち並みや、多くの人で賑わう市場、風情あふれる下町、身近にある坂道からの眺望も、先人たちが守り育ててきたものです。また、神戸は、戦災や水害、震災など多くの試練に直面する度に、まちを愛する人たちが、国籍や人種を超え、それぞれを尊重しながら支え合い、乗り越えてきました。この絆があるからこそ、神戸には多様な主体が互いに認め合い、助け合う優しさを感じることができます。

中段には、先人たちが育み、受け継がれてきたこれらの神戸らしさを、これからも守り、活かし、高めながら、世代や立場を超えたつながりの中で広く内外に貢献し続けていくことが謳われています。

そして、後段には、多くの市民の方々からいただいたご意見・メッセージが凝縮され、未来に向けて神戸のありたい姿として描かれています。「時代を彩る産業とひとが育つまち」、「新たな価値の創造を実現するまち」、「それぞれの夢に挑戦できるまち」、「一人ひとりが幸せを感じられるまち」。これらは、いずれも先人から受け継いだ神戸らしさを活かし、さらなる歩みを進めるにあたっての指針です。市民の皆様とともに作り上げた神戸のありたい姿を追い求めていくことで、まちを愛する心が生まれ、まちの誇りが育まれます。

基本構想には、このような、いつまでも、神戸らしさを磨き、まちの誇りを育み、次代に紡いでいきたいという市民の想いが込められています。

3 神戸のこれまでと今

(1) 神戸の経済発展

① 開港とともに発展したまち

神戸は 1868 年の開港をきっかけに、外国人の居住や商売が認められた居留地が設けられました。西洋風でお洒落な建築物が次々と建てられ、欧米の商社が進出し、綿花や鉄などの輸入、茶や生糸の輸出が活発となることで、日本屈指の貿易港として急成長しました。開港当初は、軽工業が中心だった貿易は、明治政府の政策のもとで重工業化が進められ、国全体の産業の近代化と重なり、造船業や製鉄業、電気機械などの重厚長大型の産業が神戸経済を大きく発展させ、神戸には優秀な人材と優れた技術力が集まりました。

明治 30 年代後半から 40 年代にかけて、西洋文化の流入とともにパンや洋菓子等の需要が高まると、西洋からパン職人の技術や製菓技術が持ち込まれ、多くのパン屋や洋菓子店が立ち並びました。また、居留地周辺では、洋服や靴の製造が盛んになり、「神戸洋服」「神戸靴」といったブランドが確立されるとともに、真珠加工やケミカルシューズなどの産業も発展し、神戸は国内でもファッションの中心地として知られるようになりました。ジャズやゴルフ等のスポーツも神戸を通じて国内に広がり、港町の神戸が持つ独特の開放的な空気は、さまざまな異文化を自然に取り込み、国内に新しいカルチャーを生み出す土壌となりました。

また、日本に訪れる外国人が増加したことで、居留地以外の北野エリアや塩屋にも異人館が建てられ、国際色豊かで多様な文化が息づくモダンな街として発展してきました。戦後の復興期には、長田区に鉄工業や靴製造業の町工場が軒を連ね、人情味あふれる下町など地域の温かいコミュニティが形成され、商店街も活気に満ち、地元の人々が集う場となりました。

現在では、国際学校や多様な宗教施設、世界各国の料理が楽しめるレストランなど、外国人が安心して暮らせる生活環境が整っています。世界的企業の日本拠点も進出するなど、グローバルな人材が活躍し、また、感性を磨いた人材が世界へ羽ばたくまちとなっています。

このように、神戸は開港をきっかけに、多くの外国人が移り住み、常に海外からの多様な文化や新しい気風を取り入れながら、国際都市・神戸として個性豊かな発展を遂げ、日本の経済や文化の成長を支えてきました。

② 時代の変化に伴う産業の転換

神戸の産業構造は、二度にわたるオイルショックや、海外の造船・鉄鋼業の台頭を踏まえ、開港以来、築いてきた重厚長大産業への偏重を脱し、時代の変化とともに転換を遂げてきました。アパレル・真珠等のファッション産業や、国際色豊かな街並みと多様な自然環境を活かしたコンベンション産業の推進に取り組み、ポートアイランドの完成を記念して開催された「ポートピア'81」では、1,600万人もの集客を達成しました。また、既存産業の高度化や多角化を図るため、電子機器や精密工業をはじめ、震災以降、医療・バイオ産業の誘致を進めるとともに、さらなる経済活性化と競争力強化に向け、飛躍的な成長が期待されるスタートアップへの投資をはじめ、成長企業や優秀な人材の誘致にも力を入れてきました。

その結果、京都、大阪の経済圏と隣接しながらも、神戸単独で経済循環率は100%超を維持し、独自の経済圏を形成してきました。今後、東京一極集中が進む中においても、神戸の経済圏を引き続き維持・成長させていくとともに、伝統産業・観光を中心とする京都や、ビジネス・金融を中心とする大阪と連携を図り、経済的シナジーを生み出すことで、関西を東京と並ぶ経済圏へと成長させていく一翼を担っていく視点も重要です。

(2) 神戸の人口推移

① これまでの人口推移

第二次世界大戦後、日本は復興とともに第一次ベビーブームを迎え、出生率の急上昇とともに人口が増加しました。さらに、1960年代から高度経済成長期を迎え、地方から都市部への人口集中が活発化し、本市でも1992年には人口が150万人に到達しました。1995年の阪神・淡路大震災では、戦後初の人口減をもたらし、一時は人口が142万人まで減少しましたが、震災の復興が進むにつれ、人口は回復し、2004年には震災前の人口を超えました。

しかしながら、日本全体では、ライフスタイルの変化、結婚・出産の時期の多様化、医療技術の進展による寿命の延伸などを背景に、少子高齢化が進展しました。その結果、2008年の1億2,808万人をピークに人口減少が始まり、本市においても同様の傾向によって2011年の154万人をピークに人口減少が続いています。

② 神戸の人口動態の特徴

市内には高等教育機関が充実しており、全国各地から学生が集まることから、18歳から23歳の若年層においては転入超過の傾向がみられます。特に、県内の他都市や近畿圏内からの転入が多く、神戸市の学術・研究環境の充実が影響していることが要因と考えられます。しかしながら、就職期を迎える23歳以降では転出超過の傾向が顕著で、特に東京圏への人口流出が大きく、これらが市内の労働力人口の減少にもつながっており、地域経済への影響が懸念されています。一方で、40代～60代の中老年層では転入超過が見られます。神戸市の都市機能や交通アクセスの良さ等を求めて、西日本や兵庫県西部からの転入者が多く、特に、西区や垂水区では周辺都市からの転入者が多い傾向にあります。

③ 今後の人口見通し

2024年の日本の出生数は70万人を下回り、9年連続で過去最少が続いており、近い将来、東京圏でも人口が減少に転じ、日本全体で人口減少がさらに加速していくことが見込まれ、経済や暮らしに大きな影響を及ぼすことが予想されます。

2024年時点で約7,000万人だった労働力人口は、2050年には6,300万人程度まで減少すると予測されており、企業の生産性低下や経済成長の鈍化が懸念されます。特に介護分野では2050年に120万人を超える介護人材不足が見込まれています。

これらに対応するためには、AI、自動化技術の導入など、新たなテクノロジーの活用も含めて、持続可能性の視点が重要です。

(3) 神戸の都市開発

① これまでのまちづくり

神戸市の都市の発展は鉄道の敷設とともに進んできました。神戸は、六甲山系が聳える地形特性から、明治・大正時代に平坦な海側に鉄道が敷かれ、沿線を中心に都市が発展してきました。戦後、日本全体では都市部への人口流入が加速し、神戸市も例外ではありませんでした。特に高度経済成長期には、工業化の進展とともに人口が急増し、住宅地の拡大が求められました。しかし、神戸市は海と山に挟まれた地形のため、平地の面積が限られており、六甲山の山麓部にまで開発が進むこととなりました。この結果、無秩序な開発が進み、環境破壊や土砂災害のリスクが高まるなどの問題が発生し、人口の受け皿確保が喫緊の課題となりました。こうした状況を受け、六甲山系北側に大規模ニュータウンを開発するため、交通インフラの整備が進められました。市営地下鉄の開通や神戸電鉄の延伸により、郊外から都心へのアクセスが向上し、居住環境が大きく改善され、西神や北区の沿線にも人口が広がってきました。当時、山を切り開き、その土砂を用いて臨海部を埋め立て、広大な宅地と産業団地を確保してきた神戸方式の開発手法が、「山、海へ行く」と言われる神戸特有のまちづくりです。

② 現在の状況

現在、全国的な人口減少に伴い、ニュータウンのオールドタウン化や、空き家・空き地の増加等による都市のスポンジ化が全国共通の課題となっています。神戸市では、これまで計画的に開発されたニュータウンにおいて、広い道路や公園が整備され、住みやすい環境を提供してきましたが、開発から一定年数が経過し、住民の高齢化や若年層の流出、住宅や公共施設の老朽化が顕著になっています。また、六甲山の山麓部では、過去の乱開発された住宅が空き家となって放置され、景観や環境面での悪影響が懸念されています。さらに、ポートアイランドや六甲アイランドにおいても、オフィスや商業施設の空室率が上昇し、都市機能の維持が課題となっています。これらは、過去の都市開発や地理的背景と密接に関係しており、神戸特有の様相を見せています。

(4) 幾多の災害を乗り越えてきたまち

① 災害の歴史

神戸市は六甲山系の急峻な地形と瀬戸内海に面した立地のため、過去に何度も水害に見舞われてきました。特に1938年の阪神大水害では、集中豪雨により河川が氾濫し、市街地が壊滅的な被害を受けました。この災害を契機に、六甲山系の砂防工事が進められ、現在では500基以上の砂防ダムが整備されています。

第二次世界大戦中、神戸市は空襲による甚大な被害を受けました。特に、1945年の神戸大空襲では、市街地の約6割が焼失し、人口は約38万人まで減少しました。しかし、戦後の復興計画により、都市の再建が進められ、神戸は再び国際貿易都市としての地位を確立しました。

1995年の阪神・淡路大震災は、日本で初めての近代的な大都市における直下型地震であり、神戸に未曾有の被害をもたらしました。人口は震災前の約152万人から約142万人に減少し、復興に向けて厳しい財政運営を余儀なくされました。しかしながら、震災後の救援活動には、震災後5か月を経過した時点で延べ122万人以上ものボランティアが全国各地はもとより世界各地から駆け付け、災害ボランティアは社会現象となり、平成7年は「ボランティア元年」とも呼ばれました。大幅な行財政改革に取り組むことで、財政危機からの脱却を図り、2004年には人口が震災前の水準を上回りました。また、特に被害の大きかった地域で行われた土地区画整理や再開発事業も、2024年11月に新長田南地区が完了し、すべての復興事業が終了しました。このように、神戸は様々な災害に見舞われながらも、そのたびに復興への強い意志を示し、市民が団結することで、再生を果たしてきました。

② 市民の誇り

神戸は、古くから「進取の気風」に富む、国際色豊かな港町として発展してきました。かつてはげ山だった六甲山は、多くの人々の長年にわたる植林によって、見事に再生し、現在は、災害から市民生活を守り、多くの人々に親しまれ、神戸を象徴する憩いの空間を創出しています。また、これまで戦災や水害、震災など多くの試練に直面するたびに、ともに手を携え、苦難を乗り越えてきました。このように、市民が手を取り合って、新たなことに挑戦し、様々な困難を乗り越えてきた経験こそが、神戸市民のまちを愛する気持ちの根幹であり、市民の誇りです。

震災20年を機に、市民によって生まれたシビックプライド・メッセージ「BE KOBE」は、まさにその象徴であり、神戸市民であることを誇りに思う気持ちや、神戸の魅力は人であるという思いが込められています。

(5) これまでの取り組みにより見込まれるまちの変化

① 神戸空港の国際化

2025年4月には、国際チャーター便の運用開始や国内便の発着枠が拡大され、2030年頃には、国際定期便の運用が開始されています。国際定期航路を持つ神戸港に加え、神戸空港が国際空港となる「第2の開港」により、観光やビジネスで海外から多くの人々が神戸を訪れるとともに、神戸から人材や情報のパイプが世界とつながることになります。

② 都心三宮・ウォーターフロントの再開発

神戸は戦前から鉄道沿線や駅を中心に都市開発が進められてきました。しかしながら、震災以降、復旧・復興が最優先となり、都市開発によるまちの魅力向上は手付かずの状態が続きました。震災から20年が経過し、復興にも一定の目途が立ち、また、絶え間ない行財政改革によって政令市上位の財政力まで回復したことをきっかけに、駅前を便利で快適な空間にしていくため、都心・三宮再整備が始まりました。2021年4月の神戸三宮阪急ビル開業を皮切りに、2022年7月には新中央区総合庁舎、2023年4月には東遊園地がリニューアルオープンしました。また、JR三ノ宮駅新駅ビルや雲井通5丁目地区の新バスターミナルビル、三宮クロススクエア、市役所2号館などの整備も着実に進んでおり、2030年頃までに三宮は劇的な変化を遂げます。さらに、ウォーターフロントでは、2021年10月に神戸ポートミュージアムが開業して以降、2024年春に神戸ポートタワーのリニューアルが完了し、2025年4月にはゼーライオンアリーナ神戸が開業しました。今後、新港突堤西地区でのマリーナ整備、京橋船溜まりの埋立による回遊性向上、中突堤周辺エリアの再整備が進み、見違える姿を現す予定です。

③ 駅周辺のリノベーション

郊外では、戦前から先人たちが築き上げてきた鉄道網などの既存インフラを有効活用し、まちの佇まいや雰囲気印象づける「まちの顔」となる駅や駅前空間のリノベーションに取り組んできました。「名谷駅」「西神中央駅」「垂水駅」をはじめ、エリアの拠点となる駅を中心に、駅前広場のリニューアルやライトアップ、憩いの空間の創出に取り組んでおり、区役所や図書館など公共施設の再配置や商業施設のリニューアル、子育て・文化環境の充実、職住近接の取り組みなど、まちや暮らしの質を高める取り組みを進めています。今後も市内各所でのリノベーションが計画されており、民間投資の誘発と相まって、次々と新たな「まちの顔」が生まれていく予定です。

④ 森林・里山の再生

神戸は海に面した市街地のすぐ背後に雄大な六甲山系が連なり、北部には田園や里山が広がっています。神戸の森林は、その多くがかつての薪炭林で、千年以上の長期にわたり燃料や肥料を供給してきました。しかし、生活様式の変化に伴い、里山の利用が停止した結果、大木や常緑樹で森が暗くなり、若木の生育が進まず、病虫害の増加や竹林繁茂、里道の消失などの課題が顕在化しています。また、かつてはげ山が広がっていたとされる六甲山は、明治時代以降の大規模な植林により、現在は全山が緑に覆われていますが、一部では木々の繁茂が過剰な状態になっています。

こうした中で、神戸の森林・里山を健康な状態で次世代に引き継ぐため、森林の適切な伐採と資源の活用、そして次世代林の再生までを一つのサイクルとして捉えた取り組みが進められています。今後、神戸市産材の流通促進や普及、森林所有者への支援、人材育成などに取り組むことで、持続的な森林管理・再生の仕組みが構築される予定です。

(1) 10年後の都市像

① “ともに描いた10年後の神戸”

以下の都市像は、神戸市基本構想に掲げた基本理念や“神戸らしさ”を踏まえ、多くの市民・関係者とともに描いた10年後（2035年）の神戸のありたい姿です。

人口減少や社会構造の変化が進む中であっても、この都市像を市民・行政等の多様な主体と共有し、共通の目標をもって、ともにまちづくりを進め、海と山に象徴される豊かな自然や、歴史とともに歩んできたまちの誇りを次代へと紡いでいきます。

2035年の神戸

神戸空港や神戸港は、世界とつながる玄関口。そこには、絶えず人やモノ、情報が集まり、多様な文化が行き交うことで、新たな風が吹く。

都心には、おしゃれで心地よい雰囲気と、温かなもてなしの心があふれる。周辺に広がる交通網によって、人と人の出会いと交流が生まれ、まちの魅力がさらに深まる。

くらし息づく街では、個性豊かな駅を中心に、それぞれの理想のライフスタイルが形となり、ゆとりある上質な時間が流れる。

山から望めば、先人から受け継いだ農村や里山、豊かな自然が悠然と広がり、夜には世界に誇れる美しい夜景が幻想的に彩る。海に向かえば、汽笛や潮風に迎えられ、ジャズを育んだ港町の歴史と文化芸術にふれながら、贅沢な時間に包まれる。食は、自然の恵みと人に生まれ、いつでも人々の心を満たす。

しごとや学びの場では、経験と新たな挑戦が融合し、未来を切り拓く力がみなぎる。

街のいたるところで、異なる世代や多様な人々が集い、支え合い、子どもたちの笑い声と皆の笑顔があふれ、まちのあたたかみが安らぎをもたらす。

人々の暮らしは、困難を乗り越え、築いてきた、たくましい礎によって守られ、それぞれの環境を思いやる行動が、次世代への安心を生み出す。

そして、まちの誇りは、神戸を愛する人々の心によって生まれ、力強く次代に紡がれていく。

② KGI（数値目標）

KGI（Key Goal Indicator）は、神戸市が目指す「10年後の都市像」を示す数値目標です。市民の幸福度や生活の質に加え、経済指標と人口指標を組み合わせることで、神戸のありたい姿を現しています。これらの KGI は、持続可能な都市の実現に向けた強い意思を示すものであり、あえて高い目標として設定しています。

社会や地域を取り巻く環境が大きく変化する中、達成には不断の努力と創意工夫が求められますが、その挑戦の過程は市民、市政において貴重な礎となります。また、高い目標を掲げることは、神戸市の都市経営における理念と志を体現するものであり、未来を切り拓く原動力となります。

【経済指標】

・実質 GDP 成長率 1%以上（年換算）の達成

「GDP（市内総生産）」は、市内で生み出されたモノやサービスの総額を示す数値で、この数値が上がるほど経済活動が活発になっていることを表します。「実質 GDP」は物価の変動を除いた、実際の成長を表す数値です。今後、人口が減少する中でも、空港の国際化や三宮の再整備、新しい技術の導入などを通じて、経済の活力を維持・向上させ、我が国全体の目標と同じ水準である年 1%以上の成長率を目指します。

・地域経済循環率※100%以上の維持

「地域経済循環率」は、市内の稼ぐ力と地域の所得の比率を示す指標で、市内で生まれた富（お金）が、どれだけ市内で使われているか等を表します。市内店舗での売上が増えたり、近隣地域からも従業員が集まる地元企業が増えるなどでこの指標は高まり、100%を超えると地域で経済が活発に循環し、独立して安定していることを示します。（100%を下回ると、ベッドタウンの傾向が見られます。）今後、神戸経済を活性化させ、地域の中で経済が循環する神戸独自の経済圏を維持・発展させることを目指します。

※地域経済循環率＝市内総生産（GDP）/市民所得

【人口指標】

・生活関連サービスを提供する市街地※の比率を維持

「生活関連サービスを提供する市街地」は一定程度人口が集積し、病院、学校、スーパーなど、生活に必要な施設が整った地域を示します。人口が減少する中でも、こうした地域を維持することで、多彩なライフスタイルが実現できる居住地として選ばれる都市を目指します。

※DID（Densely Inhabited District）地区を準用。算出は神戸市独自指標（2025年度時点）を設定

・22～39歳の社会動態の転出超過を解消

本市では大学進学などで若い世代が多く転入してくる一方、就職や結婚・子育てのタイミングで転出する人が多い傾向があります。働く場の充実、子育て支援、住環境の整備などを進め、若い世代が住み続けたいまちを目指します。

【幸福度指標】

・Well-Being 指標※に基づく幸福度 6.5 以上、生活満足度 7.0 以上を確保（2025年度神戸市実績）

「幸福度」や「生活満足度」は、市民がどれだけ心身ともに健やかに、安心して暮らしているかを示す指標です。この指標は、単なる経済成長ではなく、市民一人ひとりの「暮らしの質」を重視したものであり、人口減少が進む中でも、誰もが健やかに、安心して暮らせる都市を目指します。（数値はそれぞれの都市の市民の価値観に基づく幸福感等の平均値であり、一概に他都市の数値と比較により優劣を測るものではありません。）

※出所：一般社団法人スマートシティ・インスティテュート「地域幸福度（Well-Being）指標」

(2) 都市像を実現するための方向性

【基本姿勢】

今後10年間、神戸だけでなく、東京をはじめ全国の都市で人口が減少し、さらに加速していくことが見込まれます。この時代の流れを冷静に捉え、短期的効果ではなく、長期的な視点に立ち、**未来を見据えた都市の持続可能性を最重視**することを**基本姿勢**とし、以下の3つの方向性で取り組みを進めることで、まちの誇りを育み、次代に引き継いでいきます。

方向性Ⅰ 世界と繋がる2つの港 「新たな時代の国際都市」へ

神戸は、古くから外国との交流によって、多様な文化や気風を取り入れながら、まちを発展させてきました。空港の国際化により、神戸は国内外とのつながりがより一層強化されます。多様な人材・技術・文化を取り入れ、神戸の強みと融合させることで、人・まち・しごとの魅力を高め、これからも「海と山に囲まれた美しいみなとまち」を守り育てながら、世界に開かれたまちとして、持続的な発展を目指します。

多様な文化や人との交流を促進し、グローバルに活躍する人材を育み、受け入れ、そして神戸への想いを胸に世界へ羽ばたいていく流れを加速させていきます。

また、海と山が織りなす美しい風景や豊かな自然・文化との調和などの魅力に加え、都心・ウォーターフロント再開発による相乗効果を活かしながら、国内外へ神戸の魅力発信を強化していきます。

さらに、国内外から集まる多様な人材や企業と、市内の大学や企業、行政等が組織を超えてつながり、イノベーションを創出することで、独立した経済圏を支えるものづくり、港湾、農水産、食、観光、医療・バイオ等の既存産業の発展、新たな成長産業の創出を加速させ、東京一極集中が進む中においても、関西圏ひいては日本全体の経済成長をリードしていきます。

こうした機能強化により、神戸の国際的な存在感を高め、新たな時代の国際都市として、市民の暮らしをより豊かにしていきます。

方向性Ⅱ 個性豊かで多様な地域の融合 「日常と非日常が交わり続ける都市」へ

神戸の地理的特性や歴史の中で形作られた個性豊かなまちなみや、豊かな自然は、神戸ならではの魅力です。今後、全国的に人口減少が進む中でも、先人たちがこれまでの歴史の中で築いてきた貴重な財産を最大限に活かし、磨いていくことで、将来世代が充実したライフスタイルを送ることができるよう、これからも「多彩な表情を見せるまち」を守り育てていきます。

都心部では、居住機能との調和を図りながら、商業施設や業務機能の集積を進めていきます。国内外から多くの人を訪れ、買い物やアート、食事など五感を刺激する体験ができる場を創出します。また、魅力的なビジネス環境の整備も進めていきます。

既成市街地やニュータウンでは、まちの顔である駅を中心に、生活利便施設のリニューアルや、職住近接の取り組みを進めます。さらに、商店街などに息づく下町文化を活かし、まちの魅力と暮らしの質を高めていきます。

また、海や山、農村・里山地域など、神戸が誇る豊かな自然を守りながら、市街地との交流を促進することで、自然と調和するまちの魅力を高めていきます。

そして、こうした多彩なまちなみをつなぐ公共交通網を維持・充実させ、それぞれの日常と非日常が交わる都市空間を実現することで、市民の満足度を高め、いつまでも住み続けたいと思えるまちへ、そして、国内外から愛され選ばれる都市を目指します。

方向性Ⅲ ともに乗り越え育んだ絆 「いつまでも幸せを感じ、分かち合える都市」へ

これまでの歴史によって培われた進取の気風や、ともに災害を乗り越えてきた絆は、神戸のまちと人に受け継がれてきました。今後、先行きが不透明な変化の激しい時代においても、誰もが寄り添って助け合い、そして、新たな挑戦を続けていくことで、いつまでも「人間らしいあたたかみのあるまち」を守り育てていきます。

神戸の未来を担う子どもたちをはじめ、性別、年齢、障がいの有無、民族、国籍に関わらず多様な主体や団体が、地域の中でつながり、支え合いながら、誰もが安心して、それぞれの夢に向かって自由に挑戦でき、主役になれるまちを目指していきます。

また、子育て・教育環境の充実、健康・福祉の増進や、安全で快適な住環境を支えることで、一人ひとりの笑顔を育み、誰もが安心して健やかで心穏やかに暮らせる環境をつくります。

さらに、新たなテクノロジーと先進技術を積極的に取り入れながら、地球環境への貢献や次代をリードする防災力を強化し、より豊かで質の高い暮らしを実現させます。

そして、それらの取り組みを世界に発信することで、震災でいただいた多くの支援に、いつまでも感謝の気持ちを忘れることなく、国内外に貢献していくまちを目指します。